土浦古絵図

ぶらりまち歩きマップ

城下町・宿場町・港町　土浦

筑波山と霞ヶ浦の自然に恵まれた土浦市は、上高津貝塚をはじめとする多くの遺跡群が物語るように、遠い昔から人々が住んだ豊かな場所でした。

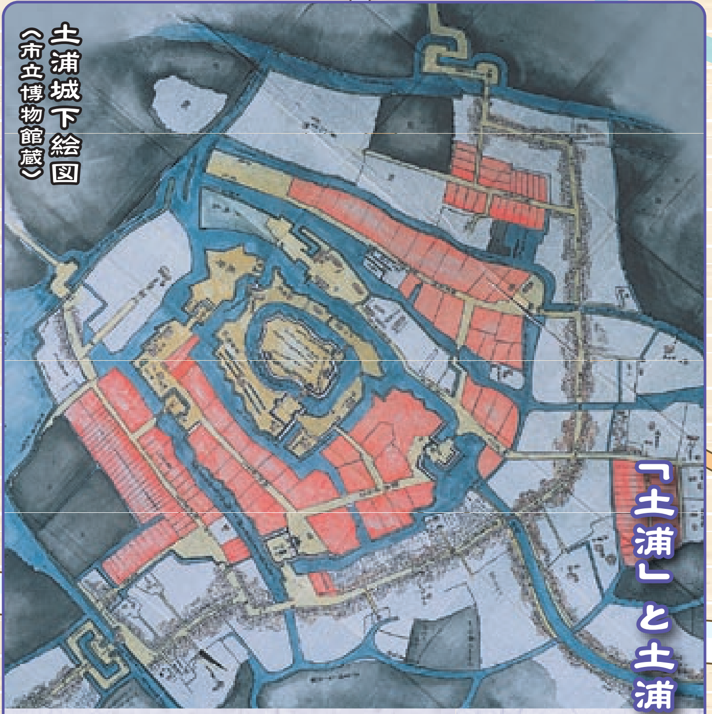
霞ヶ浦に面した河口の地に土浦城が築かれたのは室町時代頃と思われ、戦国時代には戦の舞台となりますが、城の施設や城下町が本格的に整備されたのは、江戸時代初期の慶長9年（一六〇四）、水戸街道が城下町を通る頃からです。

城下町は、内西町、外西町、鷹匠町、立田町他の侍屋敷と街道沿いの中城町、本町などの町屋敷からなり、今でも急カーブで曲がる道などに旧城下町の名残りが見られます。

土浦宿には、本陣が2か所、旅籠、問屋、商家などが軒を連ね、大いに賑わったと伝えられ、今もその繁栄ぶりを示す古い家並みが見られます。

この土浦宿は、後に享保12年（一七二七）、藩の援助によって川口河岸が整備されると、陸路の要衝としてだけでなく、港町としても栄えるようになりました。

霞ヶ浦・利根川・江戸川をつなぐ内陸水路には物資を運ぶ高瀬船が行き交い、川口河岸には船問屋が軒を連ねていたといいます。現在は、埋め立てによって河岸のおもかげは消えてしまいましたが、ヨットハーバーや遊覧船の姿がレジャーの港としての現代の土浦港の性格を物語っています。



土浦城下絵図
（市立博物館蔵）

「土浦」と土浦城のはじまり

「土浦」の名は、14世紀初め頃の古文書の中に初めてその文字が見られます。

また、15世紀初めごろの常陸国のお金持ち（富有人）を記した古文書の中には、「信太庄土浦郷若泉三郎」の名が記されています。この若泉（あるいは今泉）三郎はどのような人物であったかは詳しく分かりませんが、当時の有力者であったと思われ、その住まい（居館）が土浦城の基となったのではないかと考えられています。

4 東櫓

博物館になっています。

1 櫓門

当時のままの櫓門。

5 亀城のシイ

樹齢500年を超えると言われています。

2 西櫓

6 旧前川口門（高麗門）

前川町にあった門を移設。

3 霞門

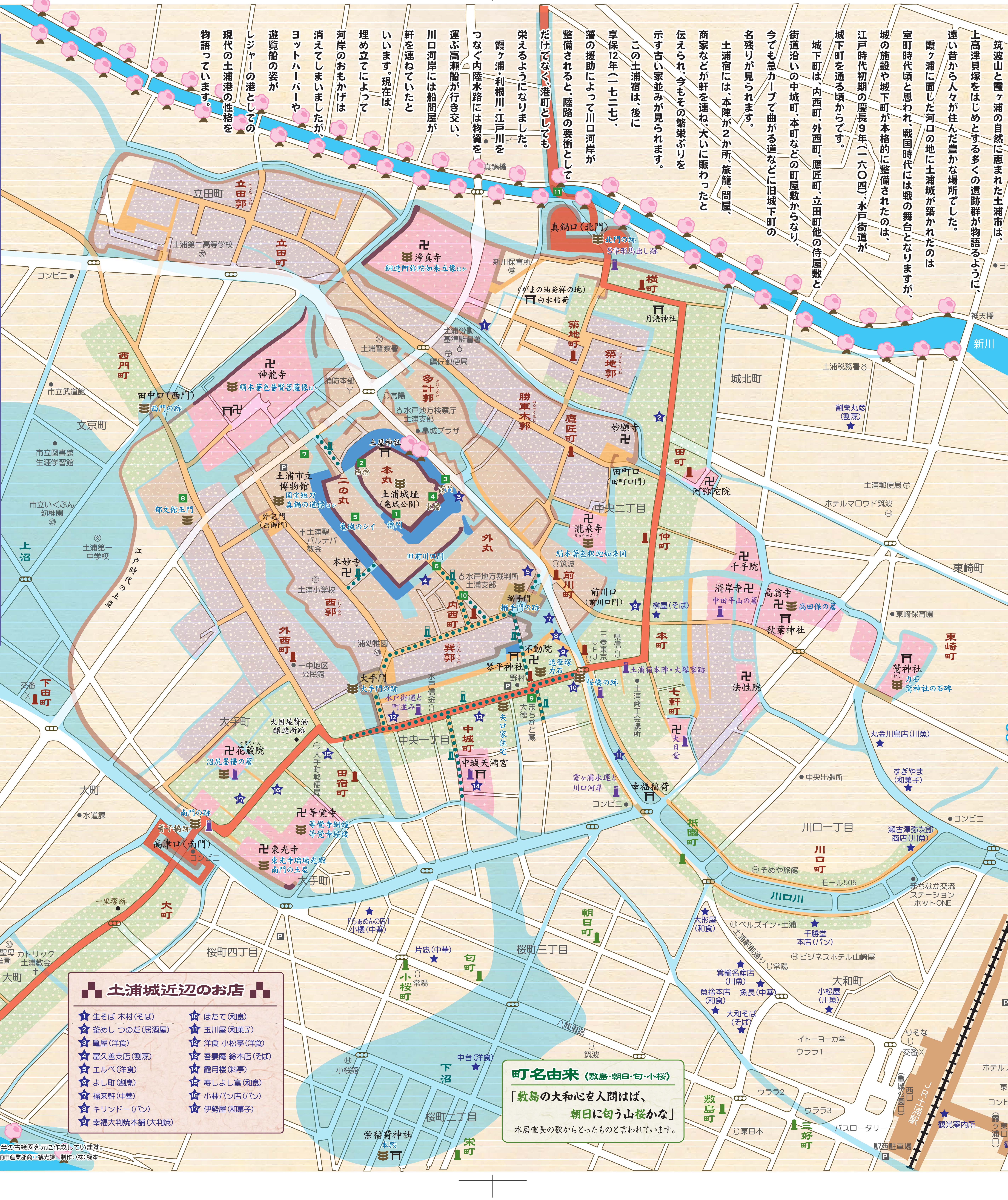
鬨の鉄砲

櫓門の太鼓

櫓門

土浦に過ぎたるものは二つあり…

かつて「土浦に過ぎたるものは二つあり、刻の太鼓に鬨の鉄砲」という里謡がありました。「鬨の鉄砲」とは土浦藩士で炮術指南を勤めた関家の「関流炮術」のことです。現在も関家及び炮術は継承されています。「刻の太鼓」については、江戸時代初期から廃藩までの約百年間、土浦城櫓門（別名「太鼓櫓」）に据えられた太鼓を打ち鳴らし、城下に時を知らせていたといわれています。太鼓櫓と太鼓がセットで現存している事例は希少。江戸時代の土浦を代表する両者の存在が城下町土浦の魅力をさらに引き出しています。



真鍋口（北門）
北門の跡
S字形馬出し跡
（がまの油発祥の地）
白水稲荷
月読神社
横町
新川保育所
真鍋橋
神天橋
新川
ヨークベニマル
立田町
立田郭
土浦第二高等学校
浄真寺
銅造阿弥陀如来立像ほか
西門町
神龍寺
絹本著色普賢菩薩像ほか
田中口（西門）
西門の跡
文京町
市立武道館
市立図書館
生涯学習館
市立いくぶん幼稚園
上沼
土浦第一中学校
郁文館正門
江戸時代の土塁
土浦警察署
土浦労働基準監督署
鷹匠郵便局
消防本部
常陽
水戸地方検察庁土浦支部
亀城プラザ
多計郭
勝軍木郭
築地町
築地郭
鷹匠町
妙顕寺
城北町
土浦税務署
割烹丸彦（割烹）
土屋神社
西櫓
本丸
二の丸
霞門
土浦城址（亀城公園）
東櫓
櫓門
亀城のシイ
土浦市立博物館
国宝短刀 真鍋の道標ほか
外記門（西御門）
土浦聖パルナバ教会
本妙寺
旧前川口門
外丸
水戸地方裁判所土浦支部
土浦小学校
西郭
外西町
内西町
搦手門
搦手門の跡
土浦幼稚園
巽郭
不動院
琴平神社
退筆塚 力石
野村
大手門
大手門の跡
水戸街道と町並み
水戸信金
まちかど蔵 大徳
矢口家住宅
中城町
中城天満宮
中央一丁目
一中地区公民館
大手町
大国屋醤油醸造所跡
花蔵院
沼尻墨僊の墓
大手町郵便局
田宿町
等覚寺
等覚寺銅鐘
等覚寺鐘楼
東光寺
東光寺瑠璃光殿
南門の土塁
南門の跡
箕子橋跡
高津口（南門）
大町
水道課
一里塚跡
土浦聖母幼稚園
カトリック土浦教会
銭亀橋
桜川
桜町四丁目
桜町三丁目
桜町二丁目
朝日町
匂町
小桜町
栄町
下沼
八間道路
筑波
田町
田町口（田町口門）
阿弥陀院
中央二丁目
瀧泉寺
絹本著色釈迦如来図
仲町
前川町
前川口（前川口門）
桝屋（そば）
千手院
濟岸寺
中田平山の墓
高翁寺
高田保の墓
秋葉神社
本町
三菱東京UFJ
県信
土浦宿本陣・大塚家跡
桜橋の跡
土浦商工会議所
法性院
七軒町
大日堂
霞ヶ浦水運と川口河岸
幸福稲荷
祇園町
川口一丁目
川口町
川口川
そめや旅館
モール505
まちなか交流ステーション ホットONE
鷲神社
鷲神社の石碑
東崎町
東崎保育所
東崎町
ホテルマロウド筑波
土浦郵便局
丸会川島店（川魚）
すぎやま（和菓子）
中央出張所
瀬古澤弥次郎商店（川魚）
大和町
敷島町
三好町
土浦駅
JR土浦駅
観光案内所
観光物産館 きらら館
駅東駐車場
駅西駐車場
川口二丁目
川口運動公園
ホテルCANKOH
水天宮
水天宮の常夜灯
川口川閘門の鉄扉と揚水ポンプ
霞ヶ浦
ラ・キュイジィーヌ・K（洋食）
千勝堂本店（パン）
ベルズイン・土浦
ビジネスホテル山崎屋
箕輪名産店（川魚）
魚搭名産（和食）
魚長（中華）
大和そば（そば）
小松屋（川魚）
片忠（中華）
中台（洋食）
ちもあんの店 小櫻（中華）
大形屋（和食）
イトーヨーカ堂
ウララ
ウララ2
ウララ3
バスロータリー
東日本
ホテルアルファ・ザ・土浦
東横イン土浦駅東口
ライフイン土浦駅東
コンビニ
宗稲荷神社
本殿

本図の見方

色の塗り分け

- 🟥 江戸時代の水戸街道
- 🟧 江戸時代の道
- 🟦 江戸時代の掘・水路
- 🟦 現在残っている掘・水路
- 🟫 江戸時代の土塁
- 🟫 現在残っている土塁
- 🟪 御用地
- ▨ 武家地
- ▨ 寺・神社
- 🟩 町方

アイコン

- ✿ 桜の名所
- ★ グルメ・買物スポット
- 文化財がある場所
- フィールド博物館解説柱
- 歴史の小径
- 旧町名解説柱

文字

- **青色文字** 指定文化財名
- **中城町** 江戸時代の旧町名
- **祇園町** 大正以後に使用された旧町名
- 中央二丁目 現在の町名

お問い合わせ先
土浦市観光協会　☎029-824-2810

土浦城近辺のお店

- ★1 生そば 木村（そば）
- ★2 釜めし つのだ（居酒屋）
- ★3 亀屋（洋食）
- ★4 冨久善支店（割烹）
- ★5 エルベ（洋食）
- ★6 よし町（割烹）
- ★7 福来軒（中華）
- ★8 キリンドー（パン）
- ★9 幸福大判焼本舗（大判焼）
- ★10 ほたて（和食）
- ★11 玉川屋（和菓子）
- ★12 洋食 小松亭（洋食）
- ★13 吾妻庵 総本店（そば）
- ★14 霞月楼（料亭）
- ★15 寿しよし富（和食）
- ★16 小林パン店（パン）
- ★17 伊勢屋（和菓子）

※この地図は、江戸時代後半の古絵図を元に作成しています。

2011年3月発行　発行：土浦市産業部商工観光課　制作：（株）梶本

町名由来（敷島・朝日・匂・小桜）

「敷島の大和心を人問はば、
朝日に匂う山桜かな」

本居宣長の歌からとったものと言われています。

10 歴史の小径

土浦城址周辺、まちかど蔵周辺などの歴史情緒ある町並みを巡る石畳の散策路です。アイコン❶が目印。
また、このエリアは町自体が歴史、文化をそのまま体験できるフィールド博物館。アイコン❷、❸、❹の場所にある解説を読みながら町歩きを楽しもう！

7 市立博物館

亀城公園に隣接する地上3階地下1階の城郭を模した造りの市立博物館です。「霞ヶ浦に育まれた人々のくらし」をメインテーマに、「大名土屋家の文化」など土浦城下町の歴史と文化、特色について詳しく紹介しています。

11 新川

春になると約200本のソメイヨシノが満開になります。枝が水面に覆いかぶさり、みごとな桜のトンネルになります。

8 郁文館正門

天保10年（1839）土屋家藩主寅直の時代に造られた藩校「郁文館」の正門部分。「郁文」とは、『論語』からの引用で、学問や教育の盛んな様を意味するそうです。藩校は、文館と武館に分けられ、藩士の子弟が学問や武道を学んだ場所です。現在は土浦第一中学校構内に保存されています。

12 帆曳船

霞ヶ浦の夏の風物詩。7月21日から10月中旬の土・日・祝日の午後に運行しています。

9 まちかど蔵 大徳

土蔵2階建て造りの4つの蔵（見世蔵、袖蔵、元蔵、向こう蔵）からなり、元蔵、向こう蔵は天保13年（1831）の建造です。現在、観光情報を提供するアンテナショップとして利用されています。レンタサイクルもあります。

土浦ケータイサイト

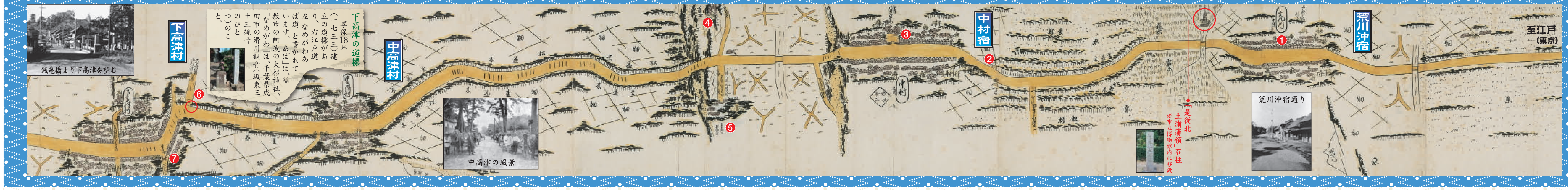
QRコードよりアクセス下さい。

イベント・食など
昔の写真
みどころ

北
縮尺［1：3,000］
0m　30m　60m　90m

miura-ori®
特許 第3644945号 商標登録 第4896048～9号 No.830
miura-ori lab 03-6457-7272 ©Koryo Miura 1978

土浦道中絵図
～殿様が描いた水戸街道～

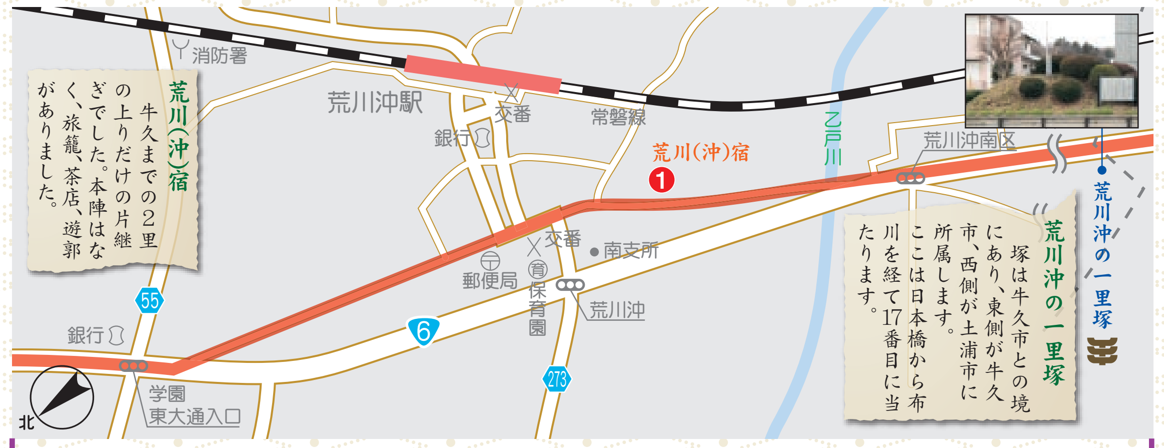

至江戸（東京）
荒川沖宿
①
荒川沖宿通り
「是従北　土浦藩領」石柱
※市立博物館内に移設
②
③
中村宿
④
⑤
中高津村
中高津の風景
⑥
⑦
下高津村
銭亀橋より下高津を望む

下高津の道標

享保18年（一七三三）建立の道標があり、「右江戸道　左なめがわあば道」と書かれています。「あば」は、稲敷市の阿波の大杉神社、「なめがわ」は、千葉県成田市の滑川観音（坂東三十三観音のひとつ）のこと。

いまの水戸街道

荒川沖宿（あらかわおきじゅく）


消防署
荒川沖駅
交番
常磐線
銀行
荒川(沖)宿
①
乙戸川
荒川沖南区
荒川沖の一里塚
交番
南支所
郵便局
保育園
荒川沖
55
6
273
銀行
学園東大通入口
北
約3km

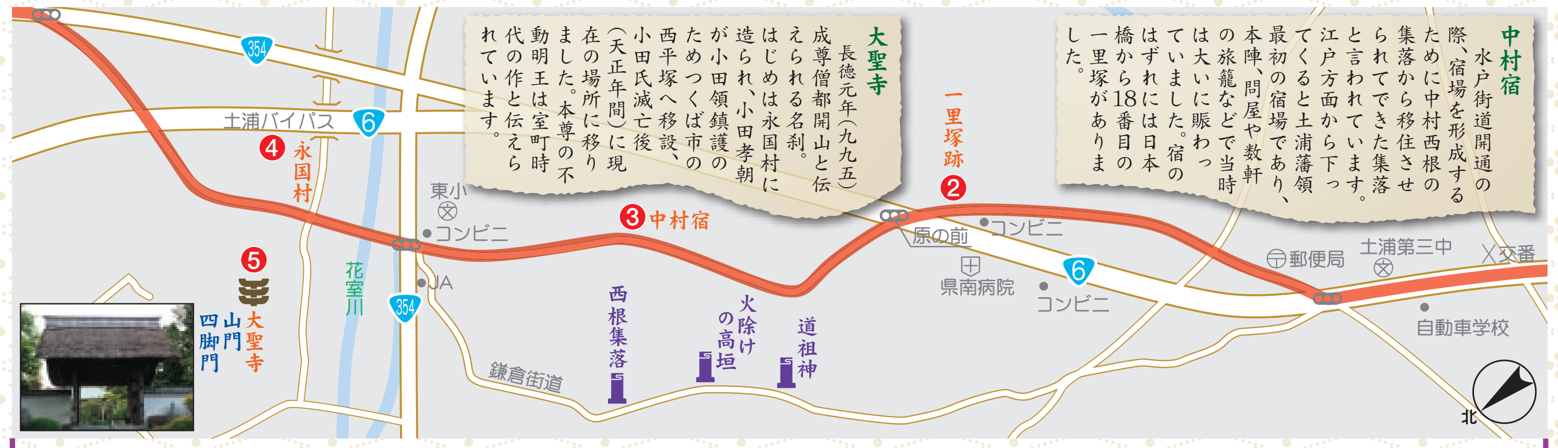
荒川(沖)宿

牛久までの2里の上りだけの片継ぎでした。本陣はなく、旅籠、茶店、遊郭がありました。

荒川沖の一里塚

塚は牛久市との境にあり、東側が牛久市、西側が土浦市に所属します。ここは日本橋から布川を経て17番目に当たります。

中村宿（なかむらじゅく）


354
土浦バイパス
6
④永国村
東小
コンビニ
③中村宿
一里塚跡
②
原の前
コンビニ
県南病院
コンビニ
郵便局
土浦第三中
交番
自動車学校
⑤大聖寺
山門
四脚門
花室川
JA
354
西根集落
火除けの高垣
道祖神
鎌倉街道
北
約3.3km

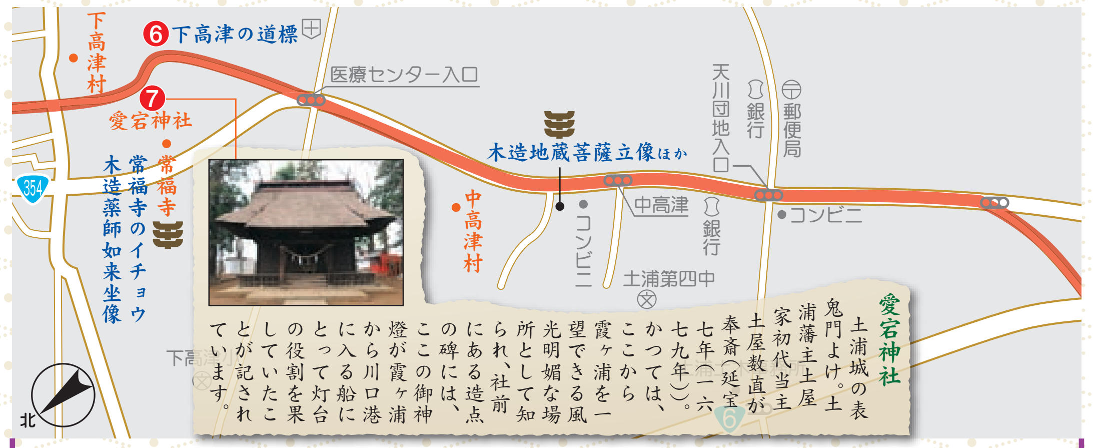
中村宿

水戸街道開通の際、宿場を形成するために中村西根の集落から移住させられてできた集落と言われています。江戸方面から下ってくると土浦藩領最初の宿場であり、本陣、問屋や数軒の旅籠などで当時は大いに賑わっていました。宿のはずれには日本橋から18番目の一里塚がありました。

大聖寺

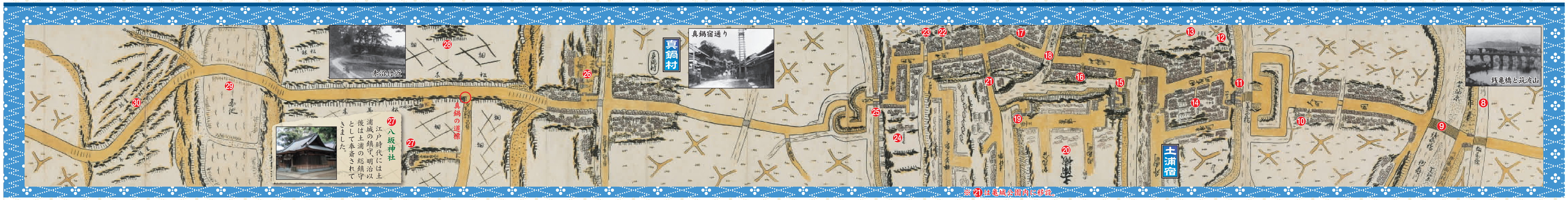
長徳元年（九九五）成尊僧都開山と伝えられる名刹。はじめは永国村に造られ、小田孝朝が小田領鎮護のためつくば市の西平塚へ移設、小田氏滅亡後（天正年間）に現在の場所に移りました。本尊の不動明王は室町時代の作と伝えられています。

中高津村・下高津村（なかたかつむら　しもたかつむら）


下高津村
⑥下高津の道標
⑦愛宕神社
医療センター入口
常福寺
常福寺のイチョウ
木造薬師如来坐像
354
中高津村
木造地蔵菩薩立像ほか
コンビニ
中高津
銀行
天川団地入口
銀行
郵便局
コンビニ
土浦第四中
下高津小
北
約2km

愛宕神社

土浦城の表鬼門よけ。土浦藩主土屋家初代当主土屋数直が奉斎（延宝七年（一六七九年））。かつては、ここから霞ヶ浦を一望できる風光明媚な場所として知られ、社前にある造点の碑には、この御神燈が霞ヶ浦から川口港に入る船にとって灯台の役割を果していたことが記されています。


銭亀橋と筑波山
⑧
⑨
⑩
⑪
⑫
⑬
⑭
⑮
⑯
⑰
⑱
⑲
⑳
㉑
㉒
㉓
㉔
㉕
土浦宿
真鍋宿通り
真鍋村
㉖
真鍋の道標
㉗
㉘
赤沼付近
㉙
㉚

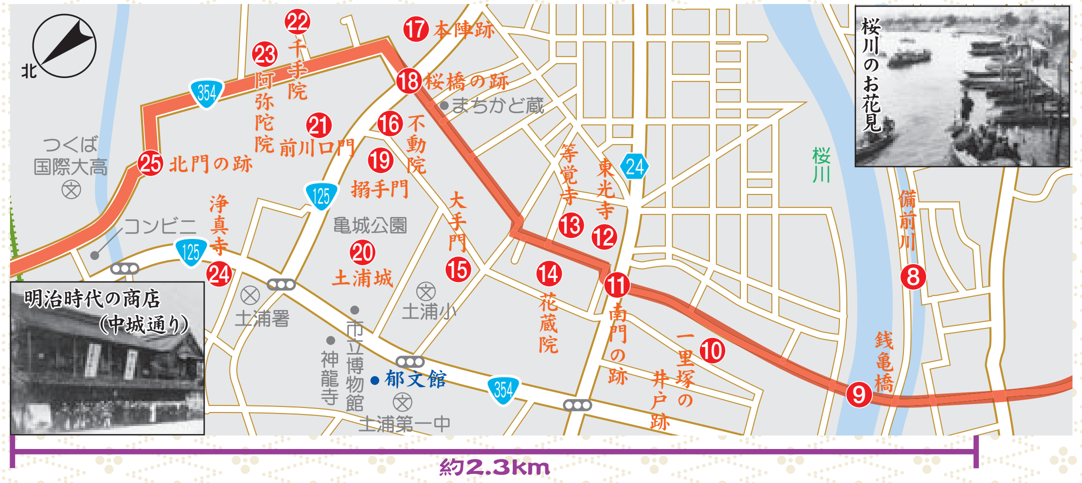
㉗八坂神社

江戸時代には土浦城の鎮守、明治以後は土浦の総鎮守として奉斎されてきました。

※㉑は亀城公園内に移設。

土浦宿（つちうらじゅく）

※詳しくは裏面参照


北
㉒千手院
㉓阿弥陀院
⑰本陣跡
⑱桜橋の跡
まちかど蔵
㉑前川口門
⑯不動院
354
⑲搦手門
㉕北門の跡
つくば国際大高
125
等覚寺
東光寺
24
桜川
桜川のお花見
備前川
コンビニ
浄真寺
亀城公園
⑬
⑫
⑳土浦城
⑮大手門
⑭花蔵院
⑪南門の跡
⑧
㉔
土浦署
神龍寺
市立博物館
郁文館
土浦小
土浦第一中
354
一里塚の井戸跡
⑩
銭亀橋
⑨
明治時代の商店（中城通り）
約2.3km

⑪南門の跡

享保12年（一七二七）に大町が築かれるまではここが土浦城の南端でした。土浦城と水戸街道の整備に伴い、慶長18年（一六一三）に川には橋（簀子橋）が掛けられ、正面に南門、脇に番所が置かれると共に、川の向こう側には「枡形」と呼ばれる城の防御施設が整備されました。貞享2年（一六八五）に大規模に改修され、形態的には角馬出となります。明治6年（一八七三）撤去されました。

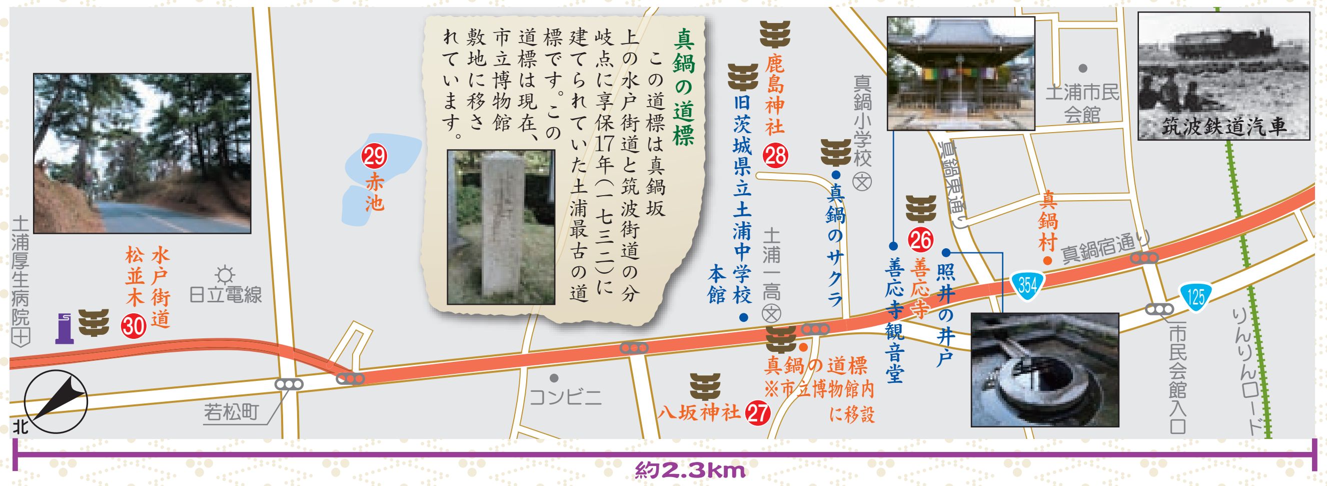
枡形や馬出といった城の主要な防御施設は城下から城内へ入るところに設けるのが一般的であり、土浦城のように水戸街道という主要街道に大規模な防御施設を設置している例は全国でも大変珍しいものです。

㉕北門の跡

北門は、土浦城の北端で水戸街道北側の出入口でもあります。慶長8年（一六〇三）設置と伝えられ、門の前には城の防御施設として半円形の馬出が築かれました。なお貞享3年（一六八六）に更に馬出が追加されたため、全国的にも類を見ないS字形の馬出となりました。

この辺りが土浦八景「北門暮雪」の場所にあたります。

真鍋村（まなべむら）


筑波鉄道汽車
土浦市民会館
真鍋村
真鍋宿通り
真鍋東通り
354
125
市民会館入口
りんりんロード
照井の井戸
㉖善応寺
善応寺観音堂
真鍋のサクラ
真鍋小学校
鹿島神社㉘
旧茨城県立土浦中学校本館
土浦一高
真鍋の道標
※市立博物館内に移設
八坂神社㉗
コンビニ
㉙赤池
日立電線
水戸街道松並木
㉚
土浦厚生病院
若松町
北
約2.3km

真鍋の道標

この道標は真鍋坂上の水戸街道と筑波街道の分岐点に享保17年（一七三二）に建てられていた土浦最古の道標です。この道標は現在、市立博物館敷地に移されています。

㉖善応寺の照井の井戸

善応寺観音堂下の泉の名。白井、鏡井とも言われています。水量豊富で日照りにも衰えず、古くから住民や街道を行き交う飲料水となり、今も湧き続けています。寛文10年（一六七〇）土浦城主土屋家初代土屋数直は、土浦城までの9町40間（1018m）樋を埋設して、城内の上水道に用いたといわれ、当時使われていた樋や枡が出土しています。

真鍋のサクラ

明治40年（一九〇七）真鍋小学校を現在地に移築した時、校庭の南端に記念植樹されたものです。その後の校庭の拡張により、現在では校庭の中央に5株が残存してます。樹種はソメイヨシノ。

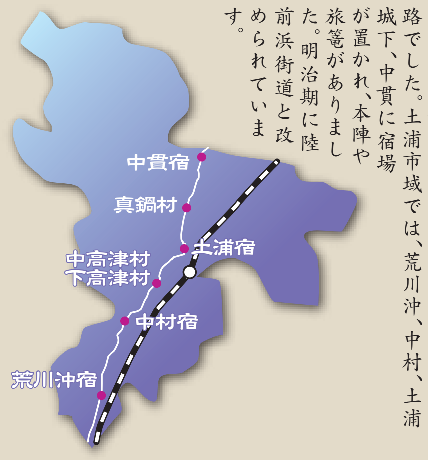
旧茨城県立土浦中学校本館（現土浦一高）

明治37年（一九〇四）に竣工。ゴシック様式を基本とした意匠で、平面構成は左右対称の凹字型をしています。当初はスレート葺。壁はドイツ下見板張り。旧制中学校では最初に国の重要文化財に指定されました。

旅のみどころ

水戸街道

江戸幕府の重要な街道の一つで、五街道である日光道中付属の街道。開通は、慶長9年（一六〇四）土浦藩主松平信吉の時といわれています。日本橋を起点に千住宿で日光道中と分かれ、水戸までおよそ30里の道程。大名や旗本、一般庶民が行き来した当時の主要道路でした。土浦市域では、荒川沖、中村、土浦城下、中貫に宿場が置かれ、本陣や旅籠がありました。明治期に陸前浜街道と改められています。


中貫宿
真鍋村
土浦宿
中高津村
下高津村
中村宿
荒川沖宿

土屋篤直（一七三二～一七七六）

3代藩主陳直の次男として生まれ、生後2年足らずで家督を相続し、九万五千石の藩主となりました。家譜によると藩主を務めるかたわら幕府の奏者番や寺社奉行などを歴任、45歳で没しました。「土浦道中絵図」は篤直が27歳の時に描いています。また、宝暦3年（一七五三）から安永5年（一七七六）までの23年間に約100冊を越える日記を書き残し、その日の天候や着衣、行き先や公務、来信などが細かく書き記されています。

また、宝暦2年（一七五二）、23歳のとき帰城した際、領内の小松村の高台に霞ヶ浦や筑波山を望む小さな庵を建て「垂松亭」と名付け、ここで八景を選定し、江戸から従ってきた奥医師らに和歌と漢詩を詠ませ、絵師に絵を描かせて「垂松亭八景詩巻」をまとめています。「垂松亭八景」に選ばれたのは「霞浦帰帆」「小松秋月」「田面落雁」「照井晩鐘」「田村夜雨」「銭亀橋夕照」「高津晴嵐」「筑波暮雪」。領内の寺院や城内の施設などを網羅したものでした。

土屋家の家紋

江戸時代の旅

江戸時代には、一般庶民が自由に村を離れて旅に出ることはできず、名主の発行した旅行手形を所有していなければ関所を通ることも、宿泊もままならなかったようです。しかし、農閑期になると、神社参詣の名目で旅に出るようになりました。神社、仏閣へ参詣や寄付をする組織（講中）を結び、村を代表し、あるいは何人かを連れだって、遠くは伊勢まで行っていました。

水戸街道と町並み「土浦宿」

水戸街道は慶長9年（一六〇四）に整備された五街道に次ぐ重要な道路で、土浦城下を南から東（霞ヶ浦）側を回って北に向かっています。土浦宿は日本橋より18里半（約74km）の距離にあり、千住で日光街道から分かれた水戸街道11番目の宿場町です。土浦宿には、大町「享保12年（一七二七）築」・田宿町・中城町からなる中城分の町と、本町・中町・田町・横町からなる東崎分の町があり、それぞれに名主が置かれていました。大名などが宿泊する本陣は、本町の大塚家（現・土浦商工会議所）と、大田家（寛保2年（一七四二）まで）・山口家（現・まちかど蔵大徳脇の道奥・延享元年（一七四四）以降）が務め、この2つの本陣を中心に旅籠、問屋、商人宿、船宿、茶屋、商家などが軒を連ねていました。

橋の跡

土浦城下に水戸街道が開通後、幕府の直営工事により慶長18年（一六一三）に桜川に銭亀橋、旧桜川には桜川橋（桜橋）、南門外の堀川に簀子橋がかけられました。現在は旧桜川は埋め立てられ暗渠となって亀城通りを流れています。橋は亀城通りが開通時に取り除かれ、現在、親柱が残っています。桜橋の跡は土浦の道路の基点となっており、道路原標が建っています。

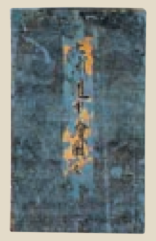
大正13年ごろの桜橋

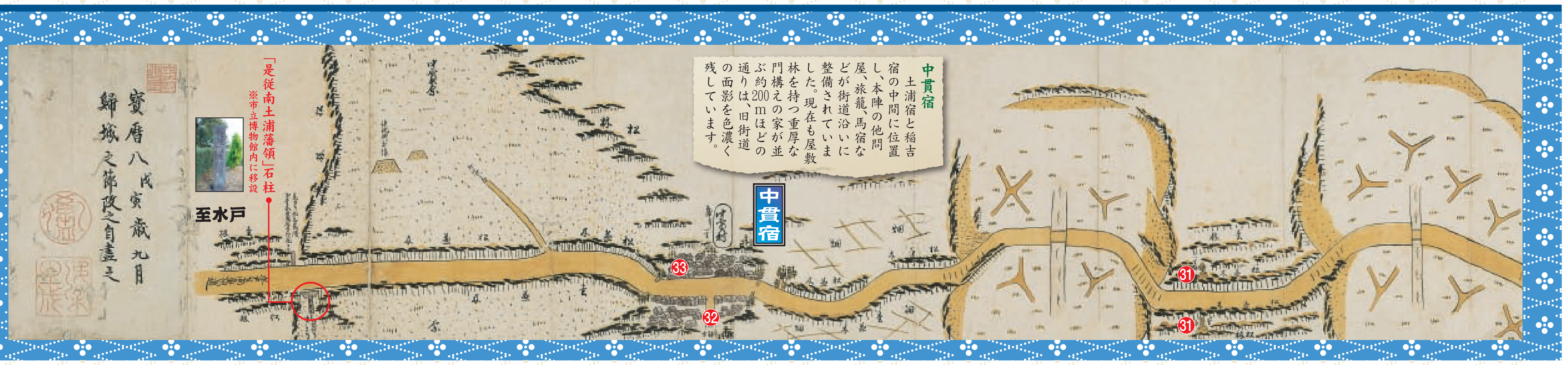
現在の桜橋

土浦道中絵図とは…

土浦藩主土屋家第4代当主篤直が宝暦8年（一七五八）、27歳の時に描いたものです。長さ18mにも及ぶ絵図には、水戸街道のうち、隅田川にかかる千住大橋から土浦藩領北端の中貫原までの街道沿いおよそ68kmの風景が描かれています。黒、黄、茶の三色の色彩で街道沿いの道標や一里塚、橋や松並木、町並みや本陣、冠木門などの要所はもちろんのこと、瓦葺と茅葺までも描き分けています。「土浦道中絵図」の表題は表紙に貼られた外題によるもので、巻末に「宝暦八戊寅歳九月　帰城之節改之自画之」の墨書きと落款が押されています。土屋家は定府で参勤交代がありませんでしたが、篤直の時代には、9月下旬から11月ごろまで土浦城に滞在することを通例としていました。篤直直筆の日記「在城中覚日記」によれば、宝暦8年（一七五八）9月11日に小石川の上屋敷を出発し、13日には土浦城に到着していました。

土浦市指定文化財。土浦市内の個人所蔵資料。




寶暦八戊寅歳九月
歸城之節改之自畫之
至水戸
「是従南土浦藩領」石柱
※市立博物館内に移設
中貫宿
㉝
㉜
㉛
㉛

中貫宿

土浦宿と稲吉宿の中間に位置し、本陣の他問屋、旅籠、馬宿などが街道沿いに整備されていました。現在も屋敷林を持つ重厚な門構えの家が並ぶ約200mほどの通りは、旧街道の面影を色濃く残しています。

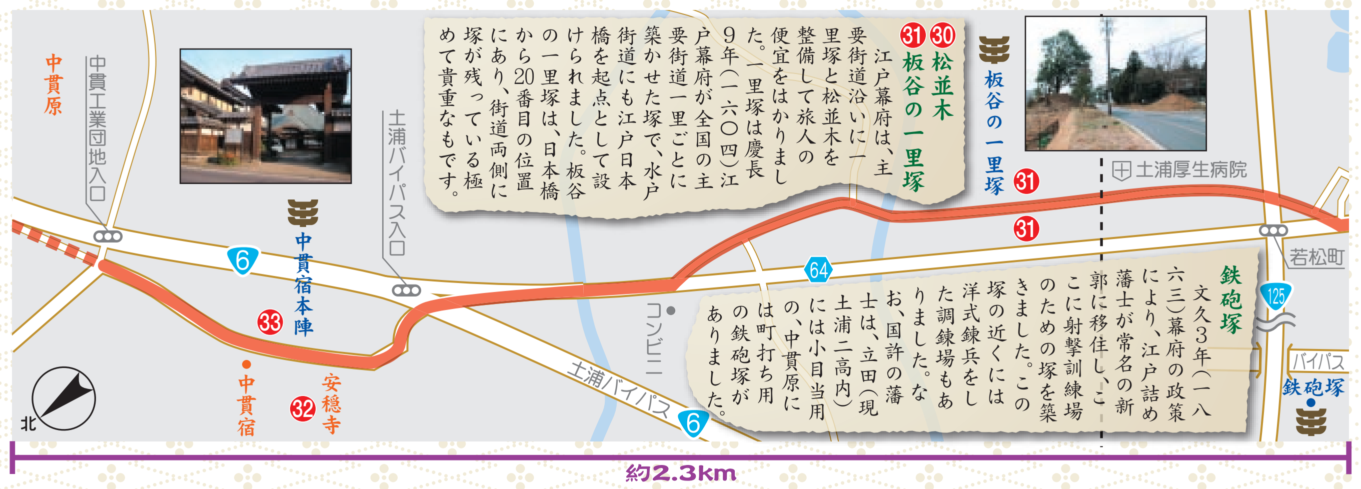
- **関流大筒（谷神）**［写真上］

大筒とは大型の火縄銃のことをいいます。筒名は「谷神」総重量約80kg、弾丸重量3.6kg、射程距離3.9km、人が抱えて撃つものとしては、国内最大級のものです。筒や地板・火挟・猿渡りなどに、揚羽蝶・菊花・唐草の金銀象嵌が施されています。銘文によると、天保14年（一八四三）8月関内蔵助知信の依頼により、武蔵住冨岡源吉久が製作したもので、象嵌の金工師は後藤清乗です。

- **関流大筒（抜山銃）**［写真下］

筒名は「抜山銃」総重量25kg、弾丸重量1.8kg、射程距離は2.8kmである。銃身や火挟・火皿・猿渡りなどには、菊花や萩花の金銀真鍮象嵌が施され、裏には寛永10年（一六三三）から寛文6年（一六六六）にかけて町打ちの記録が刻まれています。銘文によると寛永の始め、関八左衛門尉久信の依頼により、江州国友丹波大塚橘宗俊が製作したもの。宗俊の大塚任官は元和5年（一六一九）であり、寛永10年にはこの銃で町打ちを行っているので、この間の作と考えられています。

中貫宿（なかぬきじゅく）


中貫原
中貫工業団地入口
6
中貫宿本陣
㉝
中貫宿
㉜安穏寺
土浦バイパス入口
コンビニ
土浦バイパス
6
64
板谷の一里塚
㉛
㉛
土浦厚生病院
若松町
125
バイパス
鉄砲塚
北
約2.3km

㉛㉚松並木　板谷の一里塚

江戸幕府は、主要街道沿いに一里塚と松並木を整備して旅人の便宜をはかりました。一里塚は慶長9年（一六〇四）江戸幕府が全国の主要街道一里ごとに築かせた塚で、水戸街道にも江戸日本橋を起点として設けられました。板谷の一里塚は、日本橋から20番目の位置にあり、街道両側に塚が残っている極めて貴重なものです。

鉄砲塚

文久3年（一八六三）幕府の政策により、江戸詰めの藩士が常名の新郭に移住し、ここに射撃訓練場のための塚を築きました。この塚の近くには洋式錬兵をした調錬場もありました。なお、国許の藩士は、立田（現土浦二高内）には小目当用の、中貫原には町打ち用の鉄砲塚がありました。